Ｗｉｔｈコロナ　特養でのボランティアとの関りについて

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
特別養護老人ホーム芦花ホーム
小山　佳苗、新島　清彦

（コロナ禍での地域とのつながり）

１．目的

令和２年４月に新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言が発令された。それに伴い、芦花ホームでも家族面会やボランティア受け入れの制限等の感染対策を講じた。緊急事態宣言が解除されても、感染症の発症のリスクは軽減されておらず、様々な感染症対策を継続しつつ半年が経過した。

今後も感染症対策を継続する必要がある中、ご入居者が楽しみや生きがいを失わずに過ごせるように、ボランティアとともに新たな活動に取り組んだ。

２．実践内容

（１）オンラインプログラム

①ボランティア：お話しボランティア「結」

②頻　　度：月２回程度、１回３０分程度

③活動内容：オンラインで紙芝居の朗読や歌などを一緒に歌って過ごす。

（２）アロマテラピー

①ボランティア：アロマテラピー（一般社団法人 アロマハンドコミュニケーター®協会）

②活動内容：ボランティアが用意したアロマのスプレーやハンドジェルを、脱衣室やトイレ、職員休憩室に設置。適時使用して香りを通してご入居者にリフレッシュしてもらう。

③開始時期：令和２年８月から

（３）買い物ボランティア

①ボランティア：買い物ボランティア

②頻　　度：週１回

③活動内容：ご入居者の要望に応じて、食べ物等の嗜好品をボランティアに近くのスーパー等で代わりに購入をしてもらう。

（４）その他間接ボランティア

①ボランティア：縫物ボランティア、園芸ボランティア、学生ボランティア等

②活動内容：直接ご入居者と接することなく、ホーム内の環境整備や縫物を手伝ってもらう。

３．結果

買い物ボランティアは令和２年７月から再開しており、オンラインプログラムやアロマテラピーは８月から開始するなど、順次活動の幅を広げていった。

オンラインでのボランティア活動は、ご入居者も密にならないように参加人数を調整した。ご入居者がどこまで楽しんでもらえるかといった不安があったが、テレビモニター越しからのボランティアの声掛けにご入居者も笑顔で応えるなど新たな楽しみに繋がった。

ホームページやホームの広報誌を通して活動状況をお知らせすることで、「何ができますか？」といった問い合わせも増えてきた。ボランティアと一緒に検討しながら活動の幅を広げていく。

４．考察と今後の課題

コロナ禍での感染症対策の継続はご入居者にとって、少なからずストレスを与えている。その中でのボランティア活動は、ご入居者の方にとって新鮮な活動として受け止められ、多くの笑顔が見られた。直接会って触れ合うことはできないが、オンラインや間接的にボランティアが関わってくれることでご入居者も改めて地域との繋がりを感じてもらうことができた。

また、職員にとっても、ドライブスルー外出等の新たな活動を行うきっかけにもなった。

「Ｗｉｔｈコロナ」として地域との繋がりを感じてもらえるように、今後もオンライン等の様々なツールを活かしてボランティア活動を取り入れていきたい。

＜助言者コメント＞　　上之園　佳子（日本大学文理学部社会福祉学科特任教授）

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大により、介護保険施設等では家族の面会や日頃のボランティア活動を制限せざるを得ない状況が続いている中でも、入居者の方々の楽しみや生活を活性化してきた様々なボランティア活動を新しい生活様式として試みた実践報告でした。オンラインプログラム（Zoom）では、施設のテレビモニターにボランティア「結さん」が挨拶や紙芝居、さらに「じゃんけん」などのレクリエーションを行い、その後、皆さんで歌うといった双方向となるオンラインの特色を活かした活動となっていました。テレビモニターに映る人が日頃から関わっているボランティアさんとわかる入居者さんは、これまでのプログラムと同様に会話やじゃんけんなど双方向でのやり取りに一緒に参加して楽しんでいたとのことです。

一方、ボランティア活動「結さん」からは、入居者の方々が楽しんで盛り上がる様子などを映像でわかり易かったという感想は、ボランティア活動の皆さんにとって活動のモチベーションを保つことになったのではないでしょうか。職員の方々もこの活動を機に、新型コロナ対策により停滞していた入居者の方々の生活を豊かにする様々なレクリエーション等の活動の再開のために動き出しているという報告でした。入居者の方々にとって施設内での限られた空間の生活で、地域のボランティアさんとの関わりは生活を豊かにする貴重な時間だと思います。

本報告は、現状の中、職員がオンラインプログラムや買い物ボランティア、アロマテラピー、他の活動をボランティアの人達と新しい試みに挑戦した成果でした。これらの試みが安全な日常生活を取り戻すことを超えて、今後も施設での生活をより豊かにする挑戦となることを願っています。

来年度でのせたがや福祉区民学会でさらなる報告を楽しみにしております。